

越後における中世禅宗教団の研究

——新資料の紹介と南英謙宗の年譜——

竹 内 道 雄

はじめに

越後における中世禅宗教団については、昭和五十二年四月から六十二年三月までに行われた新潟県史編さんの際に、その教団形成の概勢について、峨山派系の脈絡を中心にして『新潟県史通史編二中世』の巻中「中世の生活と信仰」の章において「曹洞宗教団の展開」として一節を与えられ、その概述を試みた。

また本誌紀要（第十七号、第十八・十九合併号）の中において、右の県史編さん中に行われた資料調査の成果、および曹洞宗諸寺院の開創年代・山寺号名・開山・開基・現在の派系・本寺・末寺数・現在所等の実態調査結果を紹

越後における中世禅宗教団の研究（竹内）

介しつつ教団の展開について論述した。

しかしこれらの著作の内容は、その調査研究の成果の全てでありえないことはいうまでもない。またこの県史の編さんは、あくまで限定された期限内に行われた歴史編さんであり、長い地方史研究の一つの節目における調査研究の成果をまとめたものであるといえる。

それ故に県史編さん事業が終わった後といえども歴史研究はむろん続行されており、従ってまた新資料の発見も当然あつてよく、また編さん事業の期間中に発見された新資料にもとづいて行われるこれまで未発表の個人の研究成果があつて然るべきである。

本稿はまず第一にこうした新潟県史を始め、同県下の中

魚沼郡川西町および中里村、また十日町市の各地方史編さん中に、筆者が所蔵者より提供された禅宗及び禅思想関係の新資料の一部に釈文と注を施して紹介するものである。

ついで第二に、筆者がこれまでの地方禅宗史の研究中に多大の関心と興味をもって長く手懸けてきた曹洞五位思想の学僧、越後の種月寺開山南英謙宗(一三八七—一四五九)の行実について、根本史料にもとづいて作成した年譜を発表するものである。大方のご批正が得られれば幸いである。

一 新資料の紹介

ここに紹介し、かつ釈文に(注)を付し、私見を述べてある資料は、昭和六十年(一九八六)四月より開始され、現在続行中の新潟県十日町市史編さんの過程において、当地の曹洞宗寺院に所蔵されてあったものを調査して得られた中世禅宗教団の資料であって、当該諸寺院および十日町市史編さん委員会の許しを得て、本誌に初めて発表するものである。

(一) 智泉寺資料

智泉寺は山号瀧澤山。現在所十日町市昭和町。慶長十二年(一六〇七)開創としているが、十六世紀後半に遡りう

る可能性がある。開山は上野(群馬県)雙林寺末龍澤寺六世价州傳良。現在末寺三カ寺を有し、妻有地方(十日町市・中魚沼郡)においては、最多数の檀信徒を持つ洞門の小本寺。当寺七世鳳仙慧麟(一六五二—一七二二)は、加賀大乘寺に卍山道白に参じ、後、普藏院輪番によつて総持寺の住持も勤めた。師は元禄四年(一六九一)、妻在百三十三番札所霊場を設定、巡礼して御詠歌を作り、その版木資料が貴重な文化財として経堂に所蔵されている。

智泉寺にはこのほか、妻在札所第一番千手観世音菩薩像並びに鳳仙拜請の聯、明和七年(一七七〇)以後の歴住頂相、元禄年間の細井広沢筆山門の額、宝寿大梅法璞・指月慧印の真蹟、伝天正十六年(一五八八)二世雲高玄瑞和尚自筆墨跡、『智泉禅寺歴世傳録』、智泉寺歴住消息文集成一卷等、近世以後の寺宝・文化財級資料が多く所蔵されている。

次の本誌に掲載発表の資料は最近発見されたもので、本来門外不出の師資相承に関する秘蔵の資料である。中世末期において面授の伝法・嗣法、室中間答がどのように行われ、また当時の地方寺院における禅僧の宗教思想がどのようなものであったかが如実に示されている珍重すべき希有の資料である。

注

- (1) 梵語 mahayana の音訳、摩訶衍那の略。大乘のこと。
- (2) 即角か、とりもなおさず。
- (3) 作广生、そもさん。どういうことか。
- (4) 梵語 asankhya の音訳。インドの数詞、極大にして数えることのできない数。以下大乘仏教の功德の偉大さ、その仏法を単伝継承することの意味の深遠さを述べている。
- (5) 一五七二年。
- (6) 一州正伊（二四一六―一四八七）。山口県の人。群馬県雙林寺開山月江正文の法嗣。雙林寺二世。
- (7) 智泉寺開山价州伝良（一六〇七）。

〔説明〕

この資料は、元龜三年（一五七二）正月某日の日付けで摩訶衍（大乘）の法の授受、継承を示した証明書である。

智泉寺の本寺上州瀧澤寺の三世長川老衲撰叟が、同寺四世永潭和尚に授与したものを、さらに永潭和尚が法嗣の智泉寺開山价州傳良に付与したものである。

曹洞禅の通幻派最乗寺―雙林寺系（了庵慧明の法系）において、大乘の法としての禅が「嫡嫡相承宗門之秘訣」として特に師資相承されていたことは注目される。

(2) 住持に代わって衆僧、受戒者、戒弟を教授し、戒を受け
る導師。

(3) 一五八八年、六月八日。

(4) 智泉寺二世、円通寺・慈眼寺開山雲高玄瑞（一六二二―
三）。

(5) 瀧澤寺五世隆室淳興。

〔説明〕

この資料は、天正十六年（一五八八）六月八日付に瀧澤寺五世隆室淳興が同寺七世・智泉寺二世雲高玄瑞に付与した龍天受戒作法である。

本来ならば淳興は、同寺六世・智泉寺開山价州傳良に付与して然るべきと思われるが、二世の雲高に付与したのは、价州は勸請開山であり、現智泉寺の伽藍を再興し、実際の中興開山であったのは雲高であったから、淳興は智泉寺の法幢樹立のための作法・心得を直接に法孫の雲高に授与したのであろう。

② 龍天受戒作法



龍天受戒作法⁽¹⁾

先莊嚴道場如常在所不定或室中^并

社中宮中主人^并 侍者教授

師可入道場土地神或龍天初授戒時作神形⁽²⁾

或作位牌寺中 首座消監寺其外老僧

可持者也

監時受戒作法如常人所似者何神龍皆是凡

位也 故如斯我門大儀善龍^{ナリ}

護持未達者不可渡是三世諸佛代々

祖師秘々

淳興判⁽⁵⁾

皆天正十六季^戊 黄梅八日⁽³⁾ 付与玄瑞⁽⁴⁾

庚申之日也 梵伯

注

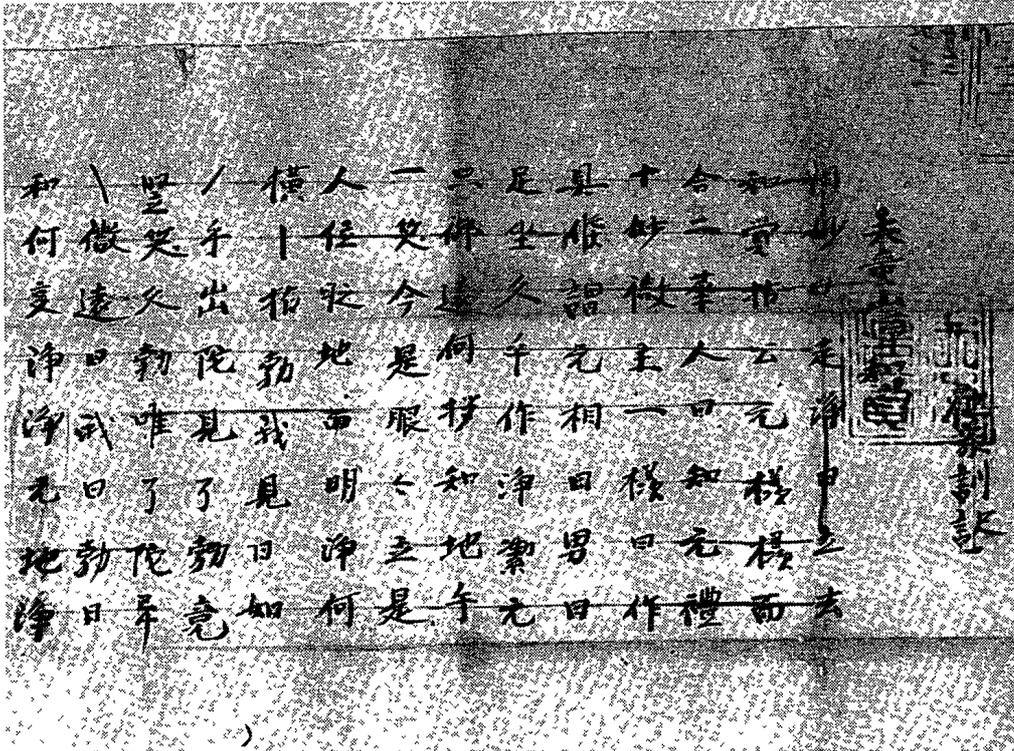
(1) 龍天の加護にもとづく受戒の作法の意。龍天は仏法を擁護する神で龍天護法善神のこと。曹洞宗では、白山妙理権現と併せ祭って雲水の修行無難・道念増進の守護神として崇拜している。

(前頁下段へ続く)

越後における中世禅宗教団の研究 (竹内)

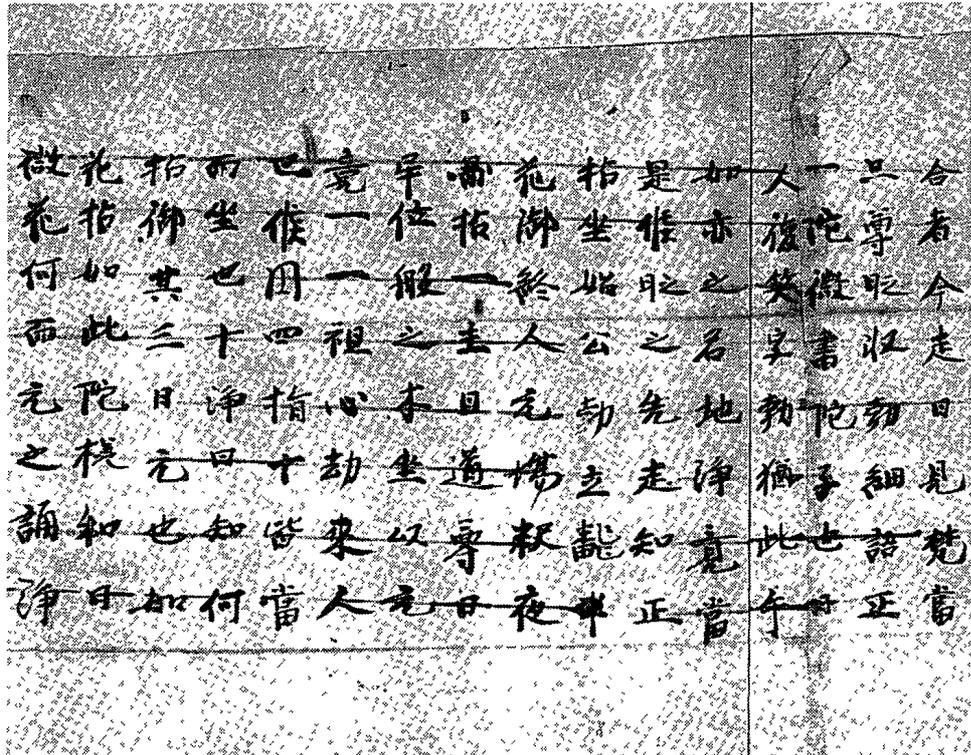
③ 他家訓訣

越後における中世禅宗教団の研究（竹内）

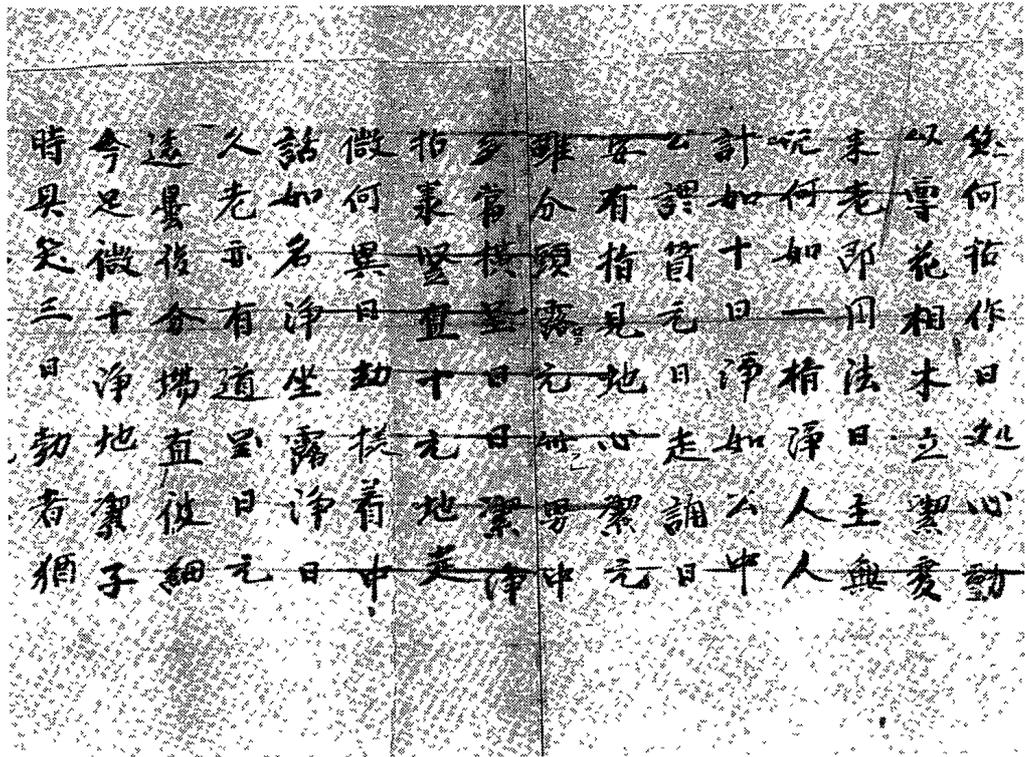


和	豎	横	人	一	只	足	具	十	合	和	相	
何	微	笑	乎	位	笑	佛	坐	候	妙	二	覺	妙
衰	遠	久	出	拈	眩	今	遠	久	謂	微	華	拈
淨	日	勃	陀	勃	地	是	何	乎	元	主	人	公
淨	我	唯	見	我	而	眼	拶	作	相	一	日	元
元	行	了	了	見	明	々	知	淨	日	様	知	様
地	勃	陀	勃	日	淨	立	地	潔	男	日	元	様
淨	日	早	竟	如	何	是	手	元	日	作	禮	而
												去

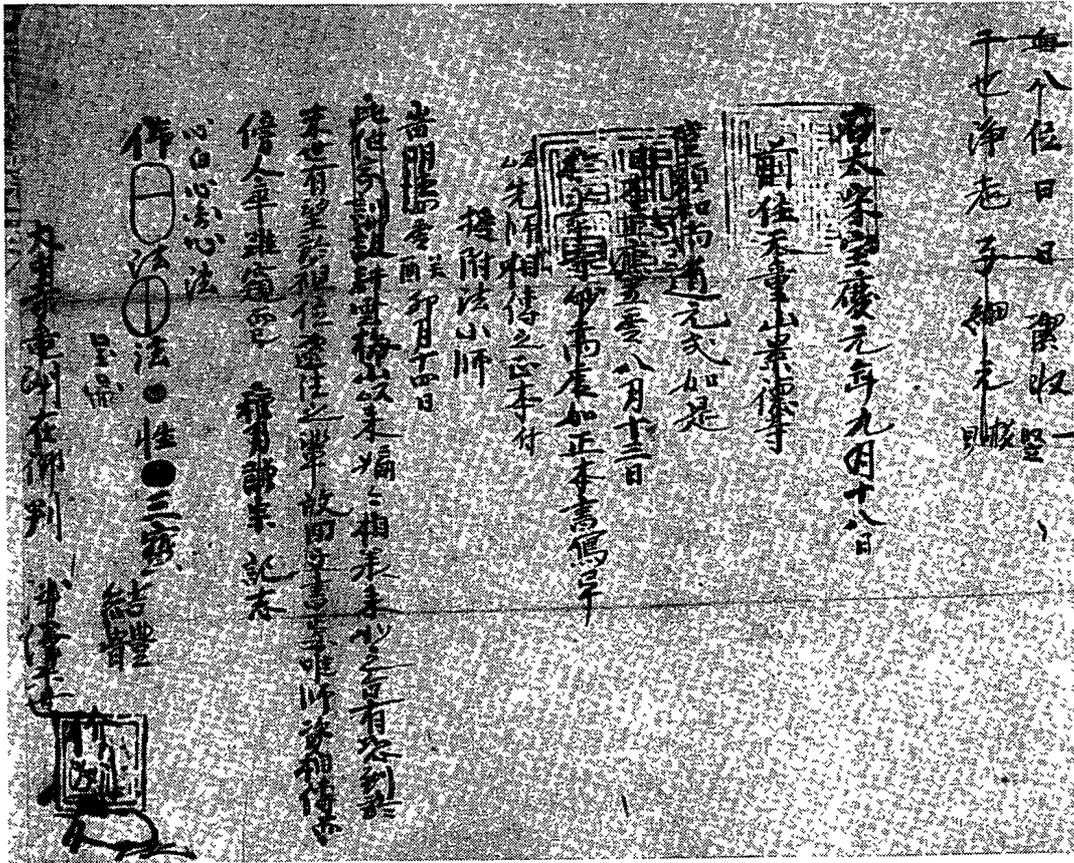
他家訓訣



微花拈而巳竟早^マ晶^ニ花拈是如人一一只合
 花拈御坐候一位拈御坐候亦後陀尊者
 何如其也円一般一終始眩之笑微眩今
 而此三十四祖之主入公之名字書収走
 元陀日浄指心木日元勃先地勃陀勃日
 之様元日十劫坐道場立走浄猶子細見
 誦和也知皆來以尊釈飜知竟^マ此也語梵
 浄日如何當人元日夜半正當午日正當



時 今 遠 久 話 微 拈 多 雖 安 公 計 咒 來 以 笑
 具 足 曇 老 如 何 承 當 分 有 謂 如 何 老 尊 何
 笑 微 後 亦 名 異 豎 橫 頭 指 箇 十 如 即 花 拈
 三 十 分 有 淨 日 奩[㊦] 呈 露 見 元 日 一 円 相 作
 日 淨 場 道 坐 劫 十 日 元 地 日 淨 梅[㊦] 法 未 日
 勃 地 直 呈 露 樣 元 日 此[㊦] 心 走 如 淨 日 立 処
 者 潔 彼 日 淨 着 地 潔 男 潔 誦 公 人 主 潔 心
 猶 子 細 元 日 中 走 淨 中 元 日 中 人 無 變 動



無 八 位 日 日 潔 収
 一 也 淨 老 子 細 元
 日 横 豎 一 夕

右太宋宝慶元年⁽¹⁾九月十八日

前住天童山景德寺

堂頭和尚道元式如是

日本正應五年⁽²⁾八月十三日

於永平寺妙高處如正本書寫畢

以先師相傳之正本付

授附法小師⁽⁴⁾

皆明德四季⁽⁵⁾ 西 卯月十四日

此他家訓訣耕雲梅山以來嫡々相承来如之旨有恐到於

末世有望於祖位盜法之輩故回文書焉唯師資相傳而

傍人・卒難窺而已。種月謙宗⁽⁷⁾ 記志

心白心圓心法

佛 日 法 法 ● 性 ● 三 寶

呈圖 結體

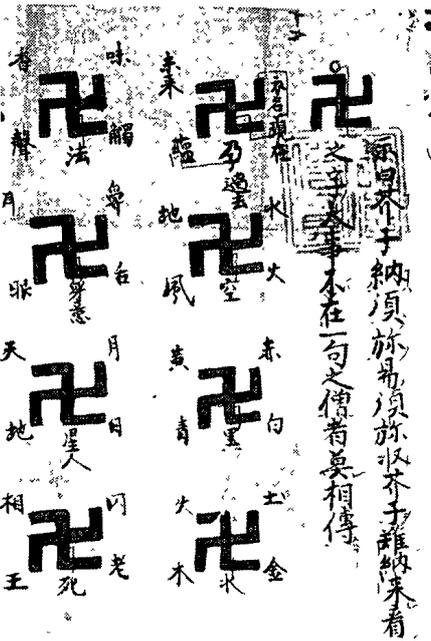
大中寺竜洲在御判 瀧澤六世

价洲⁽⁷⁾ (花押)

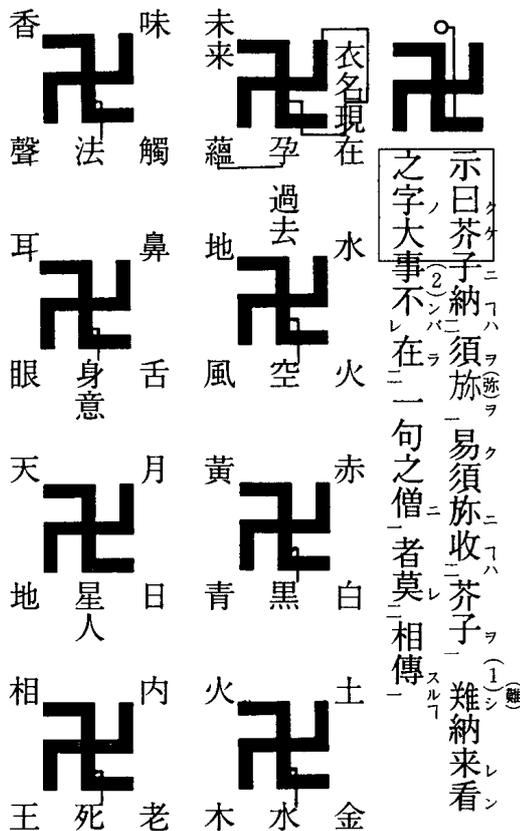
注

- (1) 一二二五年、南宋宝慶元年は日本の嘉祿元年に当たる。この年月日に、道元は正師の天童如浄から「仏祖正伝菩薩戒脈」を授けられたとされている。
- (2) 一二九二年、この年月日に、瑩山紹瑾（総持寺開山）は、永平寺妙高堂において、「仏祖正伝菩薩戒作法」一巻を書写し、同月十九日、師の徹通義介（大乘寺開山）はこれを瑩山に読校させ、ついで伝授した。
- (3) 義介を指す。
- (4) 瑩山を指す。
- (5) 一三九三年、四月十四日。

④ 卍之字大事

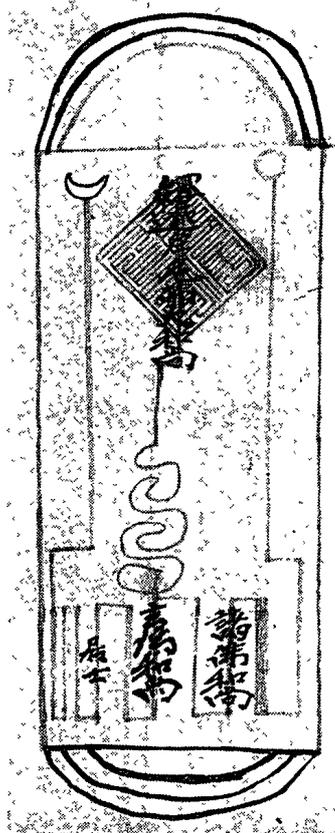
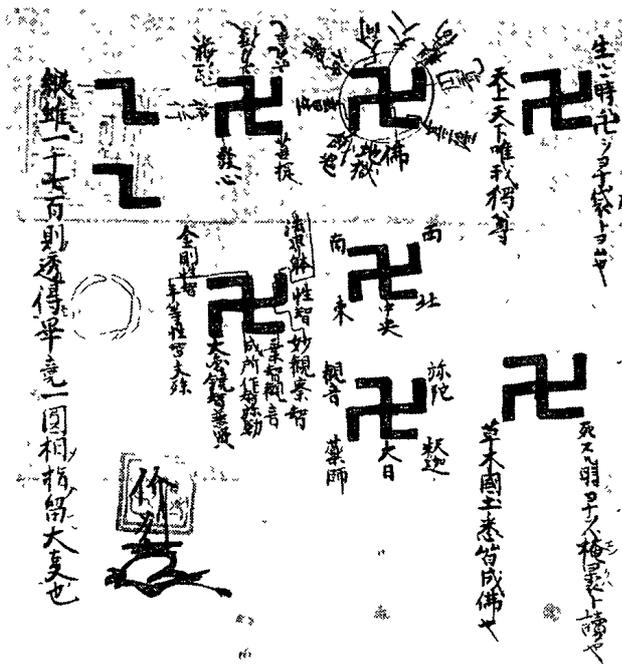


越後における中世禅宗教団の研究（竹内）

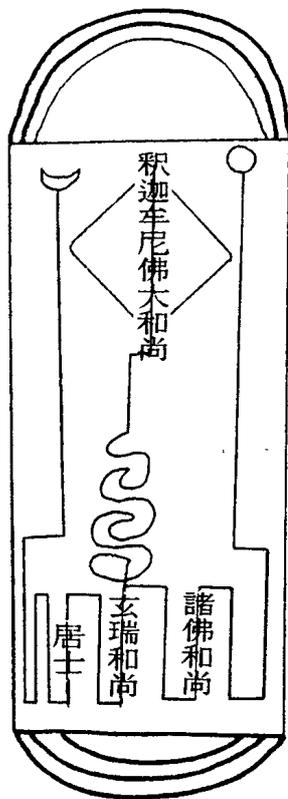


- (6) 村上市大本寺耕雲寺勸請開山梅山問本（一四二七）。耕雲寺の実開山は傑堂能勝（一三五五―一四二七）。
- (7) 南英謙宗（一三八七―一四五九）。傑堂能勝の法嗣、耕雲寺三世、種月寺開山。『顯訣耕雲註種月擲撫藁』等著作多く、「曹洞五位思想」研究の最高の学僧。この資料「他家訓訣」の「天童山浄和尚」からはじまり「種月謙宗記志」までの部分は、明徳四年四月十四日の日付をもって、南英が自己よび後世への覚書きとして書き記したものである。それが後に書写されて、栃木県大中寺（開山快庵妙慶）にも伝わって同寺の竜洲が書写し、それをさらに十日町市の智泉寺開山・瀧澤寺六世价洲傳良が書写したものである。

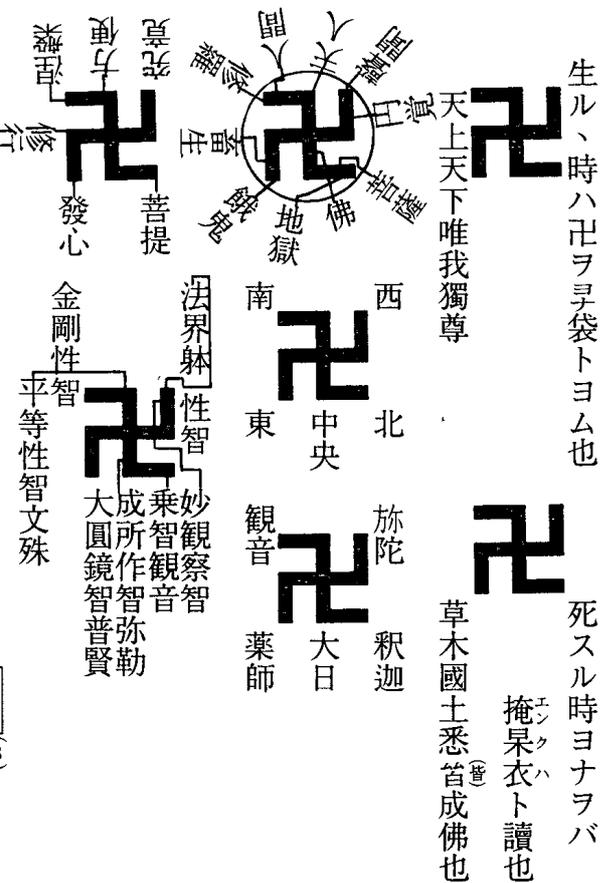
越後における中世禅宗教団の研究 (竹内)



縱雖ニ一千七百則透得^ラ畢竟一圓相指留^マ大^重也^ハ



价州^③ (花押)





芥子之主人也

今海峽居士號

居三秋尚也

法之任自任也

昔慶長拾二年

丁未

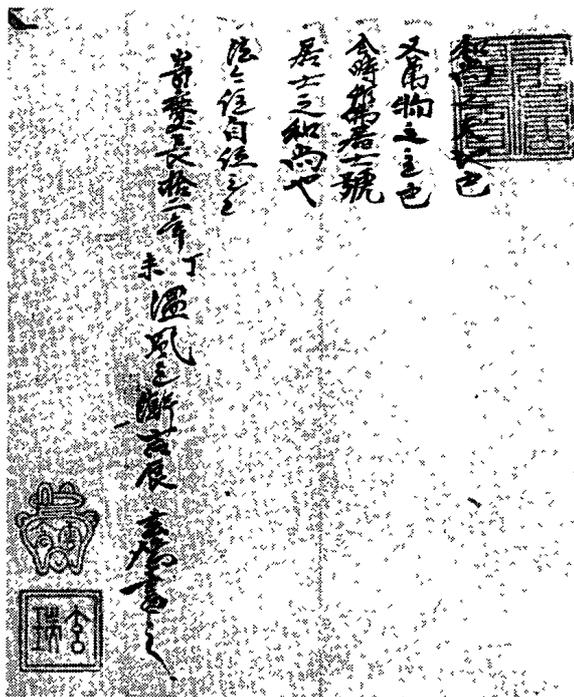
温風

三澣

吉辰

玄瑞書之

瑞玄



和尚之天地也

又萬物之主也

今時作佛居士號

居士之和尚也

法今任自位之己

昔慶長拾二年

丁未

温風

三澣

吉辰

玄瑞書之

瑞玄



瑞玄

越後における中世禅宗教団の研究 (竹内)

注

- (1) 『維摩經、不思議品』にある「須彌入芥子中」の語句によつて禅の公案としたもの。「芥子に須弥(彌)を納むることは易く、須弥に芥子を収むることは難し。納め来れ看ん」須弥は極大、芥子は極小の意。極大の須弥を極小の芥子に入れる意で常識的には不可能なことであるが大悟の境地においては可能であることを教示している。即ち大小・高低・迷悟・生仏等の二見を超えた融通無碍な大悟の境地を現した語。ここに述べられた語句は、このことを逆説的に提示をして室中の公案としている。
- (2) 大事は、曹洞宗の室中で、血脈・嗣書と共に最も重んぜられる三物の一。宗意の秘奥を图示せるもの。ここでは卍の文字のそれぞれの部分における秘奥を説いている。
- (3) 价洲伝良(前出)。
- (4) 一六〇七年。
- (5) 雲高玄瑞(前出)。

⑤ 拄扶目縁之切紙



拄扶目縁之切紙 (1)

夫拄扶者天竺(3)者牢ト云虫也長七尺五寸也
食物獅子象(2)也經二千年一祖師云成レ虫一日
一萬里飛帰也然者此行先崩(4)動轉
天竺者月將云震旦(4)者寒深云本朝者山
形云佛者錫杖云眞言者敗杖武士者
兵扶云鬼神者死活扶云禅僧者拄扶云
惡魔云恐怖也故不可容(5)者也

家門之大夏之切紙弟子斗可(5)許云
拄扶子(4)成(4)乾坤吞却(4)

岨慶長拾三季(5)樞月三澣吉辰
申

前永平雲高老衲書之
瑞玄

付(2)与宗源禅伯(2)

注

(1) 「しゆじよう」と読む。身体を支える杖。禅門では
行脚(あんぎや) (諸国を修行して廻る)の時に用い、また、戒める時

- の具や、上堂して法を説く時の具として用いる。ここでは柱
 扶の宗教的靈力を述べている。
- (2) 秘儀の伝授などに用い、横に二つに折って半分⁽¹⁾に切った
 墨書のある奉書紙。密教の口伝思想、天台本覚思想の口伝法
 門の考え方の影響で、鎌倉時代以後中世を通じ、仏教・神道
 界から茶道・剣道などの世界にまで広く用いられた。
- (3) 天竺か。印度のこと。

① 血脉袋之文



越後における中世禅宗教団の研究(竹内)

- (4) 中国。
- (5) 一六〇八年十二月三十日。

(二) 圓通寺資料

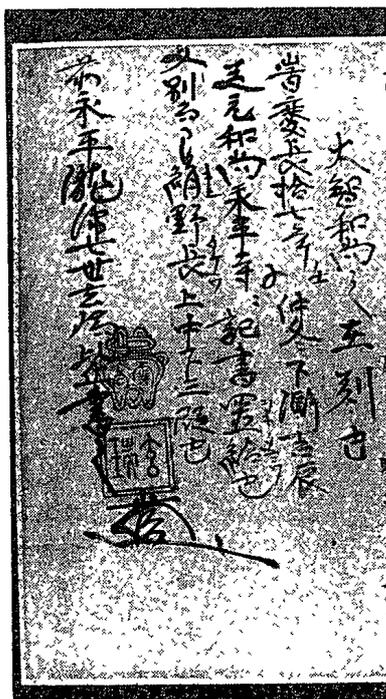
圓通寺は山号桂澤山。現在所十日町市中条。元和年間(一
 六一五―二三)開創と伝えるが、草創はさらに遡りうる。
 開山は前掲智泉寺二世雲高玄瑞。

(1) 血脉袋之文

玉ウ

血脉袋ト者小狐ギ也 其故者稻荷大明神守護
 也 佛法繁昌与御誓願候間如道也地赤也
 七重入申支大便小便不離身可懸申者也 無
 左程心逢不淨也 程可恐不淨也 又云
 風呂入間御女 湯薬侍者 御連候者風呂
 間可懸爲也。全自餘不可離身云云
 可秘

又地絹者六尺二寸分也 一二長也
 是モ上中下三段左第一血脉袋之長四寸七分也
 横三寸上分⁽²⁾成可也 爲後代可添嗣書者也



注

- (1) 禅宗において釈尊と歴代祖師・菩提寺和尚と自己を連ねる法脈を示す証明書。成仏の証。
- (2) 血脈を稻荷大明神に、血脈袋を稻荷を守護する小狐にたとえている。
- (3) 血脈は仏法興隆の誓願にもとづくもので非常に大切なものである。
- (4) 血脈袋は清浄で大切なものだから、廁や風呂に入る間などいかなる時でも身から離してはならない。血脈に対する信仰の大切さを強調している。
- (5) 釈尊から達磨・歴代祖師・師匠を連ねて自己に至る仏法継承の証明書。
- (6) 明峰素哲の法嗣素継大智(一一九〇―一三六六)。

大智和尚⁽⁶⁾之在判也

皆慶長拾七斗^{壬子}仲冬下澣吉辰⁽⁷⁾

道元和尚永平寺記書置給也^{ヲキクマツ}

又別而已絹野長^{(ママ)キン}上中下三段也^{タケワ}



瑞玄

(花押)

前永平瀧澤七世玄瑞比丘書之⁽⁸⁾

(7) 一六二二年十一月下旬。

(8) 前出群馬県瀧澤寺七世雲高玄瑞。

(三) 寶泉寺資料

寶泉寺は山号水澤山。現在所十日町市小泉。天正八年(一五八〇)開創とされる。開山は上野雙林寺十三世大通関鉄。開基は領主上杉景勝とされる。現在通幻派了庵系の雙林寺直末に属するが、左の新発見の資料により、少なくとも元和五年(一六一九)までは、通幻派普濟系の長福寺(川西町千手)末であった可能性が濃い。

① 寶泉寺之儀

寶泉寺之儀從前より貴寺之御末

寺歴然仁而御座候⁽¹⁾ 此上者普濟派下在⁽²⁾

庵和尚法要之筋目以時御取續之

処所仰也⁽³⁾ 爲向後師檀共證文仍如件

寶泉寺宿坊

元和五稔⁽⁴⁾己未仲商廿八日 文悦十

丸山新左エ門

進上長福寺

坂井弥右エ門

侍者御仲

斎藤喜右エ門

関口藤右エ門

注

(1) 宝泉寺はもともと通幻派普濟系長福寺の末寺であったことが述べられている。当寺は現在、通幻派了庵系群馬県雙林寺の直末である。

(2) 普濟善救(前出)門派。

(3) 普濟系の当寺(宝泉寺)の住職和尚の法要においては、適切な時期に連絡し、指示によって行うことをたてまえずる。長福寺は末寺八か寺をもつ曹洞宗の小本寺。

(4) 一六一九年、仲秋八月。

越後における中世禅宗教団の研究(竹内)

なお以上の三カ寺の諸資料にもとづく曹洞禅思想の地方発展の考察については、後日を期したいと念じている。

二 南英謙宗の年譜

南英謙宗(一二八七—一四五九)については、本誌前掲(一)智泉寺資料③他家訓訣の(注7)に少しく記したが、太原宗真一梅山問本の流れを汲む傑堂能勝の法嗣、越後種月寺開山。『顯訣耕雲註種月摺摺藁』『碧巖鈔』『耕雲傑堂和尚入室』等著作多く、室町時代の「曹洞五位思想」研究の大成者と考えられる。なお拙著『道元と曹洞禅の研究』(名著翻訳出版会発行)所収の「第四章曹洞禅の発展」の章中、特に「第三節耕雲寺の歴史と傑堂・南英師資の偉業」第四節「南英謙宗伝考」第五節「南英謙宗と撰述書」を参照されたい。本誌発表の「南英謙宗年譜」はその根本史料と考えられる「耕雲種月開基年譜私録」に主として寄ったが、なお諸資料と校合して矛盾する点もあり、特に得度受業の年次と法臘とのくいちがいが認められ、今後に課題を残している。大方のご叱正を得て後日補訂したいと思ひ、敢えて各種資料の原典の釈文をそのまま事蹟、参考事項の中に記入し発表した次第である。

南英謙宗年譜

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
後小松	嘉慶元	一三八七	一	<p>○〔生誕〕洛人而源爲家之子(常陸志料雜記) 薩州人也(日城洞上諸祖伝下) 薩州藤氏子(日本洞上聯燈録卷第五)</p>	<p>⑧菊地武朝、菊地城奪還を図る</p> <p>○是春、楠木正秀挙兵</p> <p>○高麗人对馬にて侵攻</p> <p>③④⑨義満、厳島・高野参詣</p> <p>④ 8 瑚海仲珊生る</p> <p>⑤ 5 通幻寂霊、越前龍泉寺に寂す70</p> <p>⑫ 明德の乱 山名氏<small>(一説明德三)</small>清敗死</p> <p>⑧ 相国寺供養</p> <p>⑩ 南北両朝の合一</p> <p>⑫ 朝鮮使来日</p> <p>○天童山景德寺、天童禅寺と改め、 禅宗五山の第二と爲す</p>
後小松	嘉慶二	一三八八	二		
後小松	元中五	一三八九	三		
後小松	元中六	一三九〇	四		
後小松	元中七	一三九一	五		
後小松	明徳元	一三九二	六		
後小松	明徳二				
後小松	明徳三				
後小松	壬申				

	義持				
<p>明德 四 癸酉</p>	<p>應永 元 甲戌</p>	<p>一三九三 一三九四</p>	<p>七 八 臘 二</p>	<p>○夏四月下澣、始讀左傳季秋終功<small>(卷)</small>(常陸志料雜記)</p> <p>○是春、謙宗叔父無文章<small>二</small>從<small>一</small>て京都相国寺に投じ、大岳周崇に見え出家す<small>(耕雲種月開基年譜私録、種月南英謙宗和尚行叢記)</small></p> <p>○是年、謙宗<small>二</small>亂年<small>一</small>從<small>一</small>叔父無文章和尚<small>二</small>而到<small>一</small>輦<small>二</small>輦<small>一</small>乃託<small>二</small>相国寺<small>一</small>(耕雲種月開基年譜私録)</p> <p>○春從<small>二</small>叔父無文章和尚<small>一</small>、見<small>二</small>相国大岳和尚<small>一</small>、薙髮受<small>レ</small>業<small>(常陸志料雜記)</small></p> <p>○八歳投<small>二</small>大岳全愚公于洛之萬年<small>一</small>。落飾進具。<small>(日城洞上諸祖伝卷之下)</small></p> <p>○甫<small>二</small>八歳<small>一</small>投<small>二</small>洛之相国寺大岳崇公<small>一</small>下髮。年滿受<small>二</small>具戒<small>一</small>。<small>(日本洞上聯燈録卷第五)</small></p>	<p>⑦ 10 足利義満、加賀大乘寺に、同寺領同国押野莊内の田畠屋敷等を安堵せしむ。ついで⑨伊勢參宮</p> <p>⑧ 南禅寺焼失</p> <p>○辺民、明に侵攻</p> <p>⑫ 義満、太政大臣となる</p> <p>○是歳、能勝越後耕雪寺を開き梅山開本を開山に請す<small>(年譜私録)</small></p> <p>○今川貞世、朝鮮に大藏經を求む</p>
<p>乙亥</p>	<p>應永 二 一三九五</p>	<p>九</p>	<p>三</p>	<p>⑥ 義満出家</p> <p>○総持寺、源翁心昭及びその門徒を峨山韶碩門下より擯出し、二百余年間の瑞世を停む</p>	

越後における中世禅宗教団の研究(竹内)

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

後小松		天皇	將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
義持				應永 三 丙子	一三九六	一〇		○幕府、倭寇を捕え明に送る ⑦足利義満、能登永光寺に同寺領若部保并に散在分の地を安堵せしむ（永光寺旧記）
	應永 四 丁丑			應永 四 丁丑	一三九七	一一		○大内義弘、朝鮮に大藏経を求む ④義満、金閣造営を始む ⑧瑚海仲珊、叡山に登り出家 義満、明に遣使
	應永 五 戊寅			應永 五 戊寅	一三九八	一二		⑧朝鮮、大内義弘の遣使に答礼、幕府これに修交を求む ○幕府、三管領四職設置
	應永 六 己卯			應永 六 己卯	一三九九	一三		⑨相国寺大塔供養 ⑪應永の乱 大内義弘、敗死
	(明惠帝 建文(元))							
	應永 七 庚辰			應永 七 庚辰	一四〇〇	一四		①7 陸奥示現寺源翁心昭寂す71 ①上杉憲定、今川貞世を伐つ <small>（一説應永三）</small> ②23 月泉良印出羽補陀寺西来院に寂す

<p>丙戌 一四〇六 二〇 (三)</p>	<p>乙酉 一四〇五 一九 (三)</p>	<p>甲申 一四〇四 一八 (三)</p>	<p>癸未 一四〇三 一七 (三)</p>	<p>壬午 一四〇二 一六 (九)</p>	<p>辛巳 一四〇一 一五 (八)</p>	<p>應永八 一四〇一 一五 (八)</p>	<p>應永九 一四〇二 一六 (九)</p>	<p>應永一〇 一四〇三 一七 (三)</p>	<p>應永一一 一四〇四 一八 (三)</p>	<p>應永一二 一四〇五 一九 (三)</p>	<p>應永一三 一四〇六 二〇 (三)</p>
<p>○十五才開一切經 (常陸志料雜記) ○一説得度受業 (年譜私録の「坐夏五十九」の逆算)</p>											
<p>○十九遊方。初掛錫於龜阜天龍。而習文字禪。(日域洞上諸祖伝卷之下) ○十九遊方。初挂錫於龜阜天龍。学文字禪。(日本洞上聯燈録卷第五)</p>											
<p>④世阿弥「花伝書」成る ③相国寺を五山第一刹とす ⑤義満、遣明使を發遣 ⑤伊達政宗叛 ⑧遣明使帰朝、義満、倭寇禁止 ○⑧15侑籍・間本ら瑩山紹瑾の年忌仏事に八月十二日に三昼夜読誦勤行すべきを格定す ②義満、遣明使發遣 日明公式貿易の開始 ○勘合貿易制定 ③朝鮮使入京 ①25越中立川寺大徹宗令寂す76 ⑥12実峯良秀寂す88 ⑤明使来日⑧義満、明に遣使 ○辺民、明に侵攻</p>											

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
称光	應永一四	一四〇七	二一		○湖海仲珊、京都建仁寺に見卓に 参ず
義持	丁亥		(一四)		
	應永一五	一四〇八	二二		⑤ 足利義満死す 51
	戊子		(一五)		⑥ 南蛮船若狭へ来航
	應永一六	一四〇九	二三		⑫ 土倉及酒屋税制定
	己丑		(一六)		⑥ 斯波義将、朝鮮に大藏經を求む
	應永一七	一四一〇	二四		⑨ 足利持氏、関東管領
	庚寅		(一七)		⑥ 島津元久、義持に謁す
	應永一八	一四一一	二五	○二十五才究「於宗奥旨」 (常陸志料雜記)	⑪ 後龜山法皇、吉野に遷幸
	辛卯		(一八)		③ 27 最乗寺了庵慧明寂す 75
	應永一九	一四一二	二六		⑫ 一休、義持に謁す
	壬辰		(一九)		⑤ 猿楽を内裏に行う
	應永二〇	一四一三	二七		⑧ 後小松院政開始
	癸巳		(二〇)		○ 辺民、明を侵す
					④ 伊達持宗叛
					⑧ 関東管領、陸奥出羽を管す
					○ 是歳、越前龍澤寺梅山聞本越後 耕雲寺の閑居に傑堂能勝を訪う (年譜私録)

越後における中世禅宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
光 義	應永二七 庚子	一四二〇	三四 (二七)		に『正法眼藏』を書写 ⑥朝鮮兵、対馬に侵攻 ⑦明使来朝、義持、明と交を絶つ ⑧世阿弥「至花道書」成る ○是歳、顯窓慶字、越後上田に雲 洞庵を開く ○天下飢饉 ①辺民、明を侵す ○飢饉疾病流行 ⑤義持、朝鮮に大藏經を求む ⑦建武式目聴訟十条増補 ④義持出家 ⑤東大寺、兵庫関を管理、朝鮮、 幕府に大藏經贈呈○周文渡鮮 ⑥石清水神人嗽訴 ⑧義持、朝鮮に大藏經板を求む。 周文帰国
	應永二八 辛丑	一四二二	三五 (二八)		
	應永二九 壬寅	一四二三	三六 (二九)		
	應永三〇 癸卯	一四三三	三七 (三〇)	○十二月二十三日、長清上座と耕雲寺傑堂能勝の会下にあ つて好夢について談笑す（耕雲種月開基年譜私録）	
	應永三一 甲辰	一四二四	三八 (三一)	○三月十一日、南英、傑堂の宗旨を了悟し、悟道、「脱參了 於殿前」失脚喫顛、忽然契旨（耕雲種月開基年譜私録）	
	永樂二二 (明仁宗)			○四月二十七日、永平寺檀那波多野元尚、道元真筆の『正 法眼藏転法輪』を傑堂に贈る ○四月二十八日、南英、師の命によってこれを二冊筆写し	

		義持	
		應永三三 乙巳 (明宣宗 洪熙元)	一四二五 三九 (三)
		應永三三 丙午 (明宣宗 宣徳元)	一四二六 四〇 (三)
	<p>一冊を授与されて商量参徹し了る (前略)</p> <p>〔翌日命謙宗寫_レ之_二冊。其一冊先師常自誦持一冊乃授與_二謙宗_一。殊以爲_二即心之證_一因_二法輪轉轉法輪之兩節_一密商量参徹了矣〕(耕雲種月開基年譜私録)</p> <p>〔夏四月念七日、永平檀越波多野元尚永平寺始祖蹟以_二轉法輪書_一贈_レ勝々命_レ宗寫焉。〕(常陸志料雜記)</p> <p>○秋、傑堂能勝常陸に赴き源義仁に謁し歳をこす</p> <p>○傑堂能勝越後の耕雲寺に帰る</p> <p>〔乙巳勝歸_二越後耕雲_一〕(常陸志料雜記)</p> <p>○この歳、傑堂より嗣法、傑堂の許を辞して備前の牛頭山に入り住庵し、庵を種月と曰う</p> <p>〔謙宗法臘二十五、世寿四十傳付事畢。乃辭_レ師入_二備前牛頭山_一住庵扁_二所居_一曰_二種月_一。蓋取_二宏智所謂_レ耕_レ雲種月之義_一〕(耕雲種月開基年譜私録)</p> <p>〔天寧寺開山傑堂能勝附_二法南英謙宗_一〕(常陸志料雜記)</p> <p>〔茲才謙宗附法畢辭入_二備前牛頭山_一扁_レ居曰_二種月_一準_二義於耕雲_一〕(同上)</p>	<p>⑤朝鮮、大蔵経板の求めを辞す。 菊池兼朝拳兵</p> <p>⑥坂本の馬借、京都に乱入 ○大内盛見「大般若経理趣文」千卷刊行</p>	

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
後花園	正長 元	一四二八	四二	○この年、耕雲寺の事務繁昌を聞いて喜ぶ〔耕雲寺事務繁昌幾乎過 _二 于先師在世。謙宗聞 _レ 之甚喜。字師兄道望其如 _レ 此耶。〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）	⑨京畿徳政一揆
義教	戊申		（三五）	○この年、耕雲寺の事務繁昌を聞いて喜ぶ〔耕雲寺事務繁昌幾乎過 _二 于先師在世。謙宗聞 _レ 之甚喜。字師兄道望其如 _レ 此耶。〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）	○この年、常陸耕雲庵景首座白雲に往き蹤跡を没す ○顕窓遣 _二 洞雲一看司と為る（種月南英謙宗和尚行業記）
	永享 元	一四二九	四三	○二月、備前の牛頭山に居る	①播磨国一揆
	己酉		（三六）	○六月二日、五月下瀬に僧祥慶が走り来て耕雲寺寺莊が地	②丹波土一揆
	応永三四	一四二七	四一	○応永三十四年以前、二十二年までの間に「顯訣耕雲註種月據撫藁」を著す ○夏四月、僧祥泰を遣して傑堂に書を送り、傑堂より種月寺方丈をもって回報さる 〔夏四月、遣 _二 僧祥泰一通 _二 書於耕雲先師。師問 _二 謙宗所居之名。泰對曰 _二 種月。〔中略〕師仍回報曰進上種月寺方丈。〔下略〕〕（耕雲種月開基年譜私録） 〔四月、謙宗遣 _二 僧祥泰一寄 _二 書於師能勝。々問 _二 宗所居之号。泰對云 _二 種月。勝又問、寺乎院乎□菴乎。泰對如 _レ 元。勝回報曰 _二 種月方丈。相貴也〕（常陸志料雜記）	⑩幕府、赤松満祐を伐つ ○秋八月七日、傑堂能勝寂す73 ○法兄顕窓慶字耕雲寺を継ぐも大衆伏せざるもの多し 〔其秋八月七日、先師遷化。坐夏四十八、世寿七十三〕（耕雲種月開基年譜私録） 七月、天寧寺開山傑堂能勝化 _二 于越後耕雲寺。寿七十二（常陸志料雜記）

				<p>民に押領されたことを告げたので、聞くに忍びず錫を発して耕雲寺に赴く</p> <p>○七月四日、到着、徒衆の暴戻を嗟く</p> <p>〔二月耕雲寺寺莊盡被_二地民押領_一。寺既爲_二耗虛_一矣。謙宗時在_二備之牛頭山_一。五月下_二澣僧祥慶_一走来告_レ之。宗坐不_レ忍_レ聞_レ之。六月二日、發_レ錫便赴_二耕雲_一。七月四日方到。〔中略〕暗嗟吁而坐、相徒徒衆百餘輩、傲然不_レ憂_二晝夜_一。覺々商量。毳衲之風殆可_レ觀者乎。〔下略〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>〔是先_二己此曆_一西元年春二月□掠_二於越後耕雲寺產_一。英其頃在_二備前牛頭山_一。夏五月僧祥慶行_レ備告_二事於英_一。不_レ忍英六月二日發徑赴_レ越。七月初四到_二耕雲_一踰_レ年。〕（常陸志料雜記）</p> <p>○五月五日、瑚海仲珊越後耕雲寺に赴き南英に見ゆ（瑚海仲珊和尚行業記）</p> <p>○四月、常陸耕雲菴の請を受く、尋で五月十一日、瑚海を伴って到る</p> <p>○五月二日、越後耕雲寺を去って東奥の秘澤山へ赴く</p> <p>○五月十一日、秘澤山へ到着</p>
<p>③義教、將軍に任ず</p> <p>○夏六月、顯窓慶字耕雲寺を退く</p> <p>○冬に至り、寺莊稍々還復する</p> <p>〔至_二夏末_一字監寺鳴_二退鼓_一而去。〔中略〕至_レ冬寺莊稍々還復〕</p> <p>（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>〔翌春寺產亦還也〕（常陸志料雜記）</p> <p>②義教、持氏討伐を企つ</p> <p>○三月、越後耕雲寺寺領半分旧に復す</p> <p>①負債償却法制定</p> <p>○四月、常陸大守義仁書を南英に寄せて秘澤山へ招く</p> <p>〔四月、常州大守義仁寄_二書於英_一、請_二於吾之耕雲菴法續之旨_一。彼</p>				

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
	永享 四 壬子	一四三二	四六 (三五)	<p>○六月初旬、寺を大田山吹岫に移す</p> <p>○六月十八日、始めて立柱</p> <p>○七月十五日、菴を瑚海仲珊に授け、十六日ここを去つて再び備前の牛頭山の旧庵に帰る</p> <p>〔五月、宗鳴退鼓而去入東奥秘澤山居焉。夏末復還備前牛頭之舊庵。〕（耕雲種月開基年譜私録）</p> <p>〔彼菴先傑堂創建之由故英不辭到常。義仁大喜。六月初旬、移寺於大田山吹而十八日創基。七月十五日、授菴於中珊、翌日去還備牛頭山。〕（常陸志料雜記）</p> <p>〔宗不_レ得拒_レ之。領衲而五月二日、宗去越靈樹赴東関秘澤山。同五月十一日正到秘澤山。義仁喜。後六月上澣、引於寺太田山吹岫。宗以甚喜。六月十八日、始立柱。七月十五日、爲中珊看主。翌日復還備前牛頭山之舊庵。〕（種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>○七月、耕雲寺の地民再び寺家を押領し、ためにこれを嗟く</p> <p>〔七月、託_レ牧之命而督其所_レ殘寺莊。地民不_レ從_レ命。復盡押_レ領寺家_レ重而爲_レ虛耗_レ矣。嗟監寺道德不_レ備歟。抑亦地民暴虐歟。何其再至_レ此哉。〕（耕雲種月開基年譜）</p>	<p>菴先傑堂創建之由故英不辭到常。〕（常陸志料雜記）</p> <p>〔夏四月。常陸大守義仁屬謙宗。馳書越耕雲。秘澤山耕雲述法續旨。〕（下略）（種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>○六月、顯窓慶字越後耕雲寺に再住す〔六月、字監寺再住。以寺莊猶半分相殘爲念焉〕（耕雲種月開基年譜私録）</p> <p>〔亦於越耕雲。字監寺再住。以寺莊猶半分。相殘念焉。〕（種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>①大内・大友合戦</p> <p>⑨大和国一揆</p> <p>○伊勢土一揆</p>

	<p>永享 五 癸丑</p>	<p>一四三三</p>	<p>四七 (四)</p>	<p>私録・種月南英謙宗和尚行業記 ○正月、顕窓慶字寂したため南英再び耕雲寺の住持となる 〔正月二十二日、字監寺圓寂。寺無主將屬敗壞。宗不獲止再出住持。〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記） 〔茲歲春越耕雲寺顯窓字寂矣。故又英來住〕（常陸志料雜記） ○十一月十八日、再び常陸の秘澤山・耕雲菴に往き、山を土峯、菴を南陽と名づける 〔十一月、復往于常耕雲□□称土峯号南陽耳〕（常陸志料雜記） 〔是年霜月七日、發錫而趣東関秘澤山。同十八日常陸耕雲庵入寺。稽留而後。義仁對宗曰。當庵者盡未來際可為耕雲隱居地。宗何名。山曰土峯。而改耕雲。曰南陽庵。蓋其志安置主山富士。夫富士者。從此當南。南方是可陽也。故云云。〕（種月南英謙宗和尚行業記）</p>	<p>○正月二十日、瑚海中珊に嗣法す ○二月一日、越後耕雲寺に歸る 〔正月二十日。於南陽庵中珊傳附事了。中珊法臘三十二。〕</p>
	<p>永享 六 甲寅</p>	<p>一四三四</p>	<p>四八 (四)</p>	<p>○正月二十日、瑚海中珊に嗣法す ○二月一日、越後耕雲寺に歸る 〔正月二十日。於南陽庵中珊傳附事了。中珊法臘三十二。〕</p>	<p>⑤世阿弥配流 ⑨遣明使中誓出發</p>

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
	永享 七 乙卯 (明宣宗 宣徳十)	一四三五	四九 (四三)	○三月二日、明に入る ○六月十五日、明州天童山に掛錫す 〔謙宗和尚航海入宋。于時大宋宣徳十乙卯六月十五日。掛錫天童。(下略)〕(種月南英謙宗和尚行業記) 〔航海赴大明。宣宗宣徳十年六月十五日矣。徑掛錫於天童景德寺。(下略)〕(常陸志料雜記)	○是歳、越後耕雲寺ノ僧瑚海中珊明ニ渡航ス(越佐史料一八二二) ①持氏、足利満貞を伐つ ⑤大内持世・大友持直合戦
	永享 八 丙辰 (明英宗 正統元)	一四三六	五〇 (四三)		④相国寺、法華経を新刻 ⑨義教、琉球に書を贈る
	永享 九 丁巳	一四三七	五一 (四四)		⑥持氏、上杉憲実不和
	永享 十 戊午	一四三八	五二 (四五)		⑧持氏、上杉憲実を伐ち、幕府、持氏を討つ(永享の乱)
	永享 十一 己未	一四三九	五三 (四六)	○二月十八日、明を出発日本へ赴く ○九月五日、長崎に帰着 ○十二月廿二日、越後耕雲寺に入る	①憲実、足利学校修造 ⑥飛鳥井雅世「新続古今集」撰述

	<p>永享十二 庚申</p>	<p>一四四〇</p>	<p>五四 (四七)</p>	<p>○是歳、美作西来寺兵火に遭う。尋で南英その廢を興し、鶴田山(定林寺と改む)</p> <p>〔作州塀和莊鶴田定林山西来寺遭兵火而荒廢矣。西来寺者石屋梁和尚開基之寺也。石屋即宗俗從祖叔父也。故檀那塀和筑前大守真祖就宗懇求其再興。義不能拒之。乃掃除灰燼再結構堂。宗乃取山号以換寺号。又取处名爲山号。而称鶴田山定林寺。(下略)〕(耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記)</p>	<p>③ 持氏の遺子結城に挙兵</p> <p>⑪ 朝廷諸臣に蔵書目錄を献ぜしむ</p>
<p>嘉吉 元 辛酉</p>	<p>一四四一</p>	<p>五五 (四八)</p>	<p>〔當日本永享十一年己未。二月十八日、發錫赴日本。(中略) 九月五日、日本長崎歸朝。(中略) 十二月廿二日還越耕雲矣。〕(種月南英謙宗和尚行業記)</p> <p>△一説南英の歸朝は翌永享十二年</p> <p>〔十二年庚申、二月十八日、天寧寺南英發大明赴本朝也。(中略) 茲春授与南九廓院於西月上座起郷念發天童山。九月五日、到長崎(下略)〕(常陸志料雜記)</p>	<p>⑥ 赤松滿祐、將軍義教を殺す(嘉吉の乱)</p> <p>① 遣明使發遣</p> <p>⑥ 京都酒屋に課税</p> <p>⑪ 義勝、將軍に任ず</p>	
<p>嘉吉 二 壬戌</p>	<p>一四四二</p>	<p>五六 (四九)</p>			

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西 曆	年 齡	事 蹟	参 考 事 項
後花園 義政（義成）	嘉吉 三 癸亥	一四四三	五七 （五〇）	○是歳、越後耕雲寺移春庵建つ 〔耕雲移春庵造営、本莊參河守房長父母之塔也〕（耕雲種 月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記） 〔南英宮「耕雲寺移春菴於本莊」是參河守房長父母祠也〕 （常陸志料雜記）	⑥朝鮮使來日 ⑨尊秀王拳兵し神器奪取 ④京都民衆、北野社を焼く
	文安 元 甲子	一四四四	五八 （五一）	○正月、「重離疊變訣」一卷を撰す 〔文安三年丙寅歳正月下澣日、紫陽 謙宗叟六十歳〕（「重 離疊變訣」奥書）	④山名持豊ら赤松滿政を亡す ①東大寺戒壇院焼失 ○上杉憲忠、足利学校校規を制定
	文安 二 乙丑	一四四五	五九 （五二）	○八月、上杉朝房、越後福地洞に鼓缶軒種月寺を建て、南 英に寄す	
	文安 三 丙寅	一四四六	六〇 （五三）	〔秋八月越後州牧上杉氏朝房属「謙宗」欲「建」 ^立 「社」。即 就「干弥彦莊多寶山之麓」ト「福地小嶺」以結「社」。因以「 耕雲先師掌所」賜種月寺之名「而扁社」。山号「福地」。蓋 取「諸地名」。（中略）先構「小屋」後扁曰「鼓缶軒」。（下略）	

	<p>文安 四 丁卯</p>	<p>一四四七</p>	<p>六一 (五)</p>	<p>(種月南英謙宗和尚行業記・耕雲種月開基年譜私録) 〔文安丙寅秋、有「州牧之命」福地洞創「種月蘭若」(下略)〕 (誠缶軒記) 〔八月、越後大守上杉朝房請「南英」營「一宇於弥彦庄多宝山下福地小嶺」。稱「福地山種月寺」云々。先構「小屋於後」扁曰「誠缶軒」。(常陸志料雜記) ○是歲、南英、陸奥会津天寧寺に住し、傑堂を開山に請す。会津・越後の間を往還す 〔春秋会津會師葦名聖喜以「天寧寺」属「謙宗」。蓋以「耕雲先師其爲「開山祖」也。故不「得」拒「之」德億強領「之」。去「耕雲種月」並數日程也。宗於「其間」而往還春秋不「常」。〕 (耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記) 〔春、葦名左世□監盛信<small>難髮号</small> 聖喜 属「天寧寺於南英」。是因「彼師傑堂開基之地」也。故英亦不「辭隨」焉。〕(常陸志料雜記)</p>
<p>文安 五 戊辰</p>	<p>一四四八</p>	<p>六一 (五)</p>	<p>○二月、南英、能勝の「洞上雲月録」三卷を據撫す (前畧) 是余之所「以」大息「也」。遂發憤略「述」耕雲室中之語「如」是。更有「密傳」不「得」叨叨。文安戊辰仲春上澣紫陽 謙謙 謙宗書 (洞上雲月録後序) ○春、種月寺本房造営、二月廿二日、始めて立柱</p>	
	<p>⑦山城の西岡徳政一揆 ⑪貞成親王を太上天皇とす (後崇光院)</p>	<p>○瑚海仲珊、南英の命により明に渡る (瑚海仲珊和尚行業記) ⑤民衆の集会禁止</p>		

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇	將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
		宝徳元 己巳	一四四九	六三 (五六)	<p>○六月晦日、越後種月寺本房落成 〔春、種月本房造営。二月二十二日、始立柱。六月晦、落成。〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>○秋、備中大守渋川右□□佐常則請により英常寺を創建する。 〔秋備中大守渋川右□□佐常則請于南英創於英常寺〕（常陸志料雜記）</p>	<p>○初秋、洪河常所、備中英常寺を建つ（耕雲種月開基年譜私録）</p>
		宝徳二 庚午	一四五〇	六四 (五七)	<p>○七月五日、越後種月寺庫院并に茶堂建つ 〔夏、種月庫院并茶堂造営。五月四日、始立柱。七月五日、造畢。〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）</p>	<p>② 27上杉朝房死す ① 足利成氏、関東管領 ④ 義政、將軍に任ず ⑥ 細川勝元、竜安寺創建</p>
		(明代宗 景泰元) 宝徳三 辛未	一四五二	六五 (五八)	<p>○七月五日、越後種月寺僧堂建つ 〔夏、種月寺僧堂造営。五月十二日、始立柱。七月五日、造畢〕（耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記）</p> <p>○九月九日、南英、省燈の「偏正五位図説」を詰難す 〔前略〕老拙榑榑攘臂於其間。而掉舌逞技。何異被毗隸哉。竊自忸怩已矣。宝徳辛未九月重陽日。〔偏正</p>	<p>⑦ 琉球船兵庫に到着 ⑧ 一条兼良の「伊呂波連歌」成る</p>

享徳 元	一四五二	六六	五位図説詰難跋)	⑧ 正徹、義政に「源氏物語」進講
壬申		(五)	○是春、越後種月寺東司建つ	
享徳 二	一四五三	六七	〔春、種月東司造営〕(耕雲種月開基年譜私録)	
癸酉		(六〇)	○三月、「鼓缶軒記」一篇を草す	
享徳 三	一四五四	六八	〔享徳癸酉暮春下澣日、三謙翁記〕(鼓缶軒記跋)	
甲戌		(六一)	○五月廿日、越後種月寺浴室建つ	
享徳 三	一四五四	六八	〔夏、種月風呂造営、四月七日、始立柱。五月廿日、造畢〕	
			(耕雲種月開基年譜私録)	
康正 元	一四五五	六九	○是歳、出羽三庄大泉曾師右京兆淳氏、玉泉寺の再興を南英に求め、南英老衰をもつて辞退する	④ 畠山長政・義就家督争い
乙亥		(六二)	〔羽州三庄大泉曾師右京兆涼氏。見下法明長老遺跡玉泉寺久属 _中 干蕪穢 _上 常以爲 _レ 念矣。有時遣 _二 一介 _一 而就 _二 謙宗 _一 求 _二 其再興 _一 宗以 _二 老衰 _一 辞 _レ 之〕(耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記)	⑩ 山城徳政一揆
			○六月、「續鼓缶軒記」一篇を撰す	○是歳、宗欽(徳嶽)再び越後耕雲寺に瑚海仲珊に参ず
			〔享徳乙亥夏在種月□□結制(中略)享徳乙亥六月下澣日記之〕(續鼓缶軒記)跋	〔羽州三庄大泉主右京兆淳氏不 _レ 忍 _レ 見 _二 玉泉寺廢 _一 馳 _レ 仗就 _二 天寧寺南英 _一 請 _二 再興 _一 英以 _レ 老固辞焉〕(常陸志料雜記)
			○八月、出羽玉泉寺の遺跡に玉漱軒を構え、尋で善見山玉	① 上杉房頭、成氏と戦う
				⑩ 諸寺祠堂錢の制を定む

越後における中世禅宗教団の研究(竹内)

越後における中世禪宗教団の研究（竹内）

天皇 將軍	年次	西曆	年齢	事蹟	参考事項
	康正 二 丙子	一四五六	七〇 (六三)	<p>泉寺を改めて国見山玉川寺と爲す</p> <p>〔春二月上澣。大泉曾師右京兆復遺其華族前越後守高坂文遵重求玉泉再興。宗雖老邁感其志而許之。秋八月、赴玉泉。輒披蓐莽構小屋名曰玉漱軒。軒前開池流泉活々。山門外有川謂之玉川。其源出於月山。其地名国見。舊稱善見山玉泉寺。今改善爲国改。泉爲川。而稱国見山玉川寺。〕（下略）〔耕雲種月開基年譜私録・種月南英謙宗和尚行業記〕</p> <p>○八月、「玉漱軒記」一篇を草す</p> <p>〔前略〕康正元年乙亥八月下澣日、紫陽三謙翁撰 享徳八月改元（「玉漱軒記」後記）</p> <p>○正月、「尖活説」一篇を草す</p> <p>〔凡尖而活者類尤多焉。〕（中略）康正龍集丙子孟春日、種月□鼓缶軒下書之。南英謙宗（「尖活説」後記）</p> <p>○四月、出羽玉川寺本房建つ</p> <p>〔夏四月。玉川本房造営。不日落成。今憶往昔長清妄夢頗亦有驗乎。〕（耕雲種月開基年譜私録）</p> <p>○二月、出羽玉川寺より越後福地洞に帰る</p> <p>〔春二月下澣、宗歸越後福地洞。法臘五十七。世寿七十一〕</p>	<p>〔羽州路大泉莊国見玉川禪寺文安丁卯春属於鬱□〕（中略）其年秋八月、発錫赴之（中略）</p> <p>〔玉漱軒記〕</p> <p>〔康正乙亥。羽州太守藤淳氏。以玉泉寺致之。起其廢。師以毫辞不及。強應之。〕（下略）</p> <p>〔日本洞上聯燈録卷第五〕</p>
	長祿 元 丁丑	一四五七	七一 (六四)	<p>○二月、出羽玉川寺より越後福地洞に帰る</p> <p>〔春二月下澣、宗歸越後福地洞。法臘五十七。世寿七十一〕</p>	<p>④太田道灌、江戸築城</p>

